

My Town

Lesson 12

■町の魅力再発見！各地で行われる町おこし

住んでいる町の魅力？そんなの、特ないよ…。ついついそう答えてしまう方もいるかもしれません。でも、本当にそうでしょうか？

最近では、自分たちの住む町の魅力を再発見して観光客を呼ぼうという取り組みが各地で行われています。例えば、築100年以上もする古民家や長屋をおしゃれなカフェにしたり、地元でしか作れないものを活かして新しい商品を開発したり、大規模な音楽イベントを開催したりして、都心部にはない魅力を売りに宣伝をするのです。中には新たなビジネスや地域の雇用に結びつけるなど意欲的な取り組みも見られます。

過疎が進んでいる地域では以前から頻繁に行われてきましたが、最近では休日には人がいなくなってしまう都市部郊外のベッドタウンでも地域を活性化させる試みが行われています。このように、多くの自治体で大小様々な町おこしが行われているのです。

あなた自身がつまらないと思う町でも、実は意外な取り組みが行われているかもしれません。町の魅力を発見すると、毎日が少し楽しくなることでしょう！



■日本から独立して町おこし？「ミニ独立国」

かつて「ミニ独立国」が次々と「建国」した時代がありました。それは、井上ひさしの小説『吉里吉里人』（きりきりじん・1981年刊行）が大ヒットしたことがきっかけでした。

『吉里吉里人』とは、東北地方の小さな村が日本政府に愛想をつかし、吉里吉里国として独立してしまうストーリーです。その国では独自の言語やお金などが流通し、高度な医療を世界に売り出そうとします。当然日本政府は独立に反対しますが…。

この書籍が刊行された翌年、実際に吉里吉里という名前の駅がある岩手県大槌町が吉里吉里国として「独立」を宣言するという出来事が起きたのです。もちろん、これは正式に国として認められたわけではなく、あくまで町おこしの一環でした。ですが、これがきっかけとなり、各地で次々と「建国」を表明する自治体が現れました。

国の中しか使えない地域通貨の発行や、「パスポート」でスタンプラリーのような催しをするなど、各地の「ミニ独立国」は大いに盛り上がり、中には多数の観光客を呼び込むことに成功した「国」もあつたほどでした。ブームの最盛期だった1986年には、なんと200もの国が誕生したそうです！

やがてブームの衰退とともに「ミニ独立国」は姿を消していき、2012年には和歌山県すさみ町の「イノブータン王国」や岩手県二戸市が中心の「カシオペア連邦」などが残っている程度です。しかし、自分たちの住んでいる地域を「国」として日本にアピールする試みは、自分たちの町の魅力を全国の人々に知つてほしいという気持ちの表れだったのでしょう。あなたの住む町も、ひょっとしたら昔、「ミニ独立国」だったのかもしれませんね！